DEVELOPMENT OF NEW HOUSING UNIT PLAN

TAKASHI TAKIZAWA — * 1

"nLDK problem in housing unit plan" is to be the area of stick. If this area became outside, the relationship of private room and family room become dim. Now, family exists in "Do family." So, "Living in type" is better. This new standard plan is "New living in type". Open and flexible. By "big common and double living room", we developed a new style housing plan which connects family's member.

本格的でナイーブな個人と家族は、外部（社会）に直接さらされることとなったからである。

外部 ↔ 棒状領域

外部

↕

↕

家族

個人

このことが親と子と断絶を生み、個人の不要なストレスを増やし、さまざまな好ましくない社会現象を生む、一つの契機となったと考えることが出来る。

これらのことを踏まえ、21世紀を向かえるに当たり、家族共生をキーワードとして、集合住宅における新しい住居像を探り、一つの試みとして、現在形の標準的住戸プランを提案してみたい。

2. 51C 型のどこが問題か

nLDK 住戸の元祖といわれる 51C 型（＊2）を見ると、前述した棒状領域は存在せず、外部領域・家族領域・個人領域、という従来からの空間構成になっている。したがって、問題としての nLDK という発想から、問題としての棒状領域という発想に頭を切り替えてみると、下図のような関連性が浮かび上がってくる。

図2 棒状領域の発生

明らかに、問題の発生因は、経済効率優先の間口狭小住戸を開発し、定型化し、大量生産した民間デベロッパーの側にあると考えることが出来る。大正期の中廊下型の戸建住宅の発想を引き継ぎ、狭い間口でも成立するグレーゾーンとしての棒状領域を持った、民間の定型 3LDK プランこそ、nLDK 問題の発生源である。

この視点から見れば、51C 型はリビングインタイプ(* 3)の古典的プランであり、nLDK 問題とは何ら関わりを持たない空間配列によって構成された、戦後過渡期のミニマムなコンセプト住宅であると考えて良い。問題は別のところにあったと見るべきである。

*¹ Manager, Tokyu Architect & Engineers Inc.

3. 民間定型3LDK マンションの罫

棒状領域(グレーゾーン)を持った民間型3LDKタイプが、なぜ、ここまで定型として普及してしまったのかを考えると、デベロッパーの思惑と、購入者の意向が図らずも一致したということに思い至る。

デベロッパーの思惑とは、既に述べたように、最も経済効率の良い狭小間口の縦長型(うなぎの寝床型)の住戸ユニットを、中廊下を挟んで2つの独立した洋室(個室)を備えた、プライバシーの高い核家族向けの新しい居住形式であるとして定式化し、大量生産することであり、購入者側の意向とは、欧米風の個人主義的生活に対する憧れから生じた住居像、夫婦のプライバシーを守る主寝室をまず確保し、それに居間と子供室を加えたプライバシー重視の核家族(ニューファミリー)型の住居像を実現させたいということであった。現実には、2つの独立洋室と6畳の和室という構成では、子供の数が増えると成立しない考え方ではあったが、基本コンセプトとしては、若い購入者層にとって、充分、魅力的であったと考えることができる。

もう一步踏み込んでみると、その個人主義の変形としてのプライバシー幻想とは、核家族における夫婦の性という領域を神経質なまでに過大に評価し、子供たちから隔離した場所を無理にでも作ろうとしたことの結果である。個人主義=プライバシーという名目のために、親が自分たちの性的領域を聖なるものとして特化したことにより、その反作用として、子供にも聖なる領域としてのかぎ付きの子供室を提供せざるを得なくなった。

親は自分たちの(性としての)聖なる領域を優先して確保したという後ろめたさから、免罪符として、子供にも同様の個室を与えても良いという裏取り引きの論理を無意識のうちに組み立てた。子供は親がそのような秘密の部屋を持っているのなら、子供も当然(民主主義の世の中なのだから)同じものを要求して良いはずだという論理を自分のものとした。このように、良い悪いという判断のあいまいなままに、個室願望意識が徐々に進行し、定着した。

これに不動産業界がうまく乗っかり、決して質の高いとは言えない、狭小間口の棒状領域(グレーゾーン)を持った3LDKタイプの住戸を、買い替えのし易い定型住戸として一般化し、大衆的マンションと言えただれでも思い浮かべるまでに、大量に供給し、普及させていったというのが真相であると考えられる。

4. PP分離という幻想

PP分離とは、誰が考え出したものなのだろうか。戦後すぐの時期に言われた寝食分離をもじった表現であろうが、100m²以下の庶民の住宅で、パブリックとプライベートを分けるということは、大袈裟でナンセンスな発想のように思える。家族みんなで使う領域と各個人が使う領域を1枚のドアによって左右に分けることにより何か高級感が生まれるということなのだろうか。個室群住居という理論によらずに、欧米流の大邸宅をイメージしたであろうパブリックゾーン、プライベートゾーンという言葉を使うことじたい、時代めかしており、切実なりアリティが感じられない。

結局、PP分離とは、個人と家族という関係をきちんと見据えることをせず、イメージとしてのパブリックな領域とプライベートな領域とを、あたかも客に対して提示するかのように、家族に対して差

し示したというトリックに過ぎない。これもまた、デベロッパーの宣伝により、高級な住宅には必要なコンセプトのように言われ、購入者に不要なストレス(価値基準)を与えるものとなった。

このPP分離プランには、定型3LDK型と同じように棒状領域(グレーゾーン)が巾をきかせており、住居の中に外部がはいり込んでしまっている。本来、家族を結び付けるものとしての住居が、家族相互を分離する方向に作用するように構成されている。

これは家族室ゾーンを接客空間として規定し、個室ゾーンには別の動線系を設けたため、来客の時ばかりでなく、通常の時においても、家族室ゾーンと個室ゾーン(特に子供室)との交通がなくなり、外~玄関~個室~玄関~外と、家族の誰とも会うことなく出入りできるプランになっているからである。あまりにも、来客を意識過ぎて、動線を分離してしまったことの弊害は大きい。客に挨拶することも大切なしつけであり、社会への回路の一つであるということに忘れていたために、作られてしまったプランである。

居間ゾーン(LD)は基本的には家族のための空間であり、時に接客のための空間としても使えるということに過ぎないのであるから、家族コミュニケーションを第一に考えた家族室(LD)の構成を計画する必要がある。家族コミュニケーションを犠牲にした、隔離された接客空間という考え方は、標準的な集合住宅の住戸のあり方として、基本的認識の方向が違っていると言わざるを得ない。今、求められているのは、PP分離という形ではなく、PP融合という形である。

スケール、制度、時代、場所を考えない、イメージ重視のコマーシャルな概念は、常に危険性を持っており、慎重に対応すべきであるということを理解しておく必要がある。

5. 拒絶(孤立)から許容(共生)へ——居場所がつくる

時代は今、大きく変わろうとしている。戦後の50年は戦前の反動、欧米への憧れから、表層的には、個人主義を標榜し、個人主義化してきたように思える。しかし、真に個人というものが存在せず、本当の個人主義の訓練を経ない我々の社会にあっては、そのストレスは大きく、様々な問題を生み出しているように思える。

今、求められているのは、ギスギスした孤立した個人と個人の対立関係(相互の拒絶)ではなく、癒しという言葉でイメージされる、個人と個人が共生する、ゆるやかな融合関係(相互の許容)である。家族においても同様に共生が求められている。現代社会においては、家族である(Be)ことは、家族する(Do)ことの積み重ねの上に成立する。家族する(Do)ためには共通の場、家族の居場所が必要である。日々のコミュニケーションが生まれる心地よい共通の居場所をつくり、日々、家族する(Do)することを実践できる場とすることが大切である。

意識においては、個人—社会という関係と、個人—家族という関係を、その時々において各人が使い分けることは当然のことではあるが、住居という空間構成においては、下記の関係がきちんと成立していれば充分であるように思える。

個人スペース—家族スペース—外部(社会)スペース
この家族スペースを通ることがコミュニケーションの一場面を提供し、家族する(Do)ことの小さな実践となる。子供が成長するまでの間、親と子のコミュニケーション、子供同志のコミュニケーショ

ン、親同志のコミュニケーションを生む、居心地の良い場所を確保することが大切である。人間は集まって住む動物であり、家族同志のふれあいは生命体としての自然である。

リビングインをベースとして、自然な動線を計画し、なにげなく家族すること（コミュニケーション）の機会を増やしていくことは、家族共生への一つの道である。家族という気配の中で、見守られているという安心感のもとに生活するということは、子供にとって大切なことであり、そこから情緒の安定が生まれる。癒しの時代といわれる今、日々の暮らしの中で、気分のなごむ居心地の良い居場所をつくっていくことが必要であることを理解すべきである。

6. 空間の配列（空間図式）を考える

すでに述べたように、定型3LDKのタイプは、棒状領域（グレーゾーン）が外部としてそのまま住居に突き刺さった棘のように作用して、きわめて不安定な形状（性状）となっている。この住居内に入り込んだ棒状の異領域を取り除くこと、あるいは内部へと引き戻すことが今、必要である。ここで注目したいのは、定型3LDKタイプにおける和室の存在である。

図3 定型3LDKタイプの中のと室

この何にでも使える和室があることにより、定型3LDKタイプはいままで生き長らえることが出来たと考えられる。家族室とふすま（可動間仕切）でつながった和室は、間仕切を開け閉めすることにより、フレキシブルに使われてきた。時に親の寝室となり、時に子供の勉強部屋となり、時に応接間となり、時に病室となり、時に老人室となり、というように。この家族室—和室という関係を、家族室—個室と読み替えることにより、新しい空間の関係（空間図式）が生まれる。

家族の共生する場（領域）としての家族室と、それに可動間仕切で接する個人（夫婦もしくは子供）の場（領域）をペアとして設定する。この可動間仕切が装置として、二つの場を、時に一つの領域として空間を一体化し、時に二つの領域として空間を分割する。この装置を介して、個人（夫婦もしくは子供）スペースと家族のスペースがおおらかな（ゆるやかな）関係性を持つことが出来る。

以上のことを整理すれば、とりあえず、以下の空間構成の図式が成立する。

図4 家族と個の領域・3ゾーンの空間構成

大きな家族スペース（コモンスペース）があり、そこに夫婦のスペース、子供のスペース、水廻りスペース（サービススペース）が接続するという図式である。これを定型3LDKタイプ（外廊下型・75m²程度）を想定して考えてみれば、外廊下に面して家族室と子供室があり、バルコニーに面して家族室と夫婦室があるという構成になる。玄関は当然、家族室に面して設けることになる。ゾーニングとしては、子供室側を動的ゾーン、中央を水廻り（サービス）ゾーン、バルコニー側を静的ゾーンと考えることが出来る。

この空間図式を以下の2つのパターンで考えてみる。

- 大きな家族室（ビックコモン）を中心に、オープンな住居を構成する。（リビングイン、子供室は分割可能）
- 家族室を2つに分け、子供室の面する動的ゾーンと夫婦室の面する静的ゾーンのそれぞれに設ける。これにより、奥行きのある住居構成となる。（リビングイン、子供室は分割可能）これを図式化すると下図のようになる。

図5 家族の共生する空間図式・2つのタイプ

Aタイプは、個室群住居的な縦割りのシンプルで開放的な2ゾーン構成。Bタイプは子供を中心とした動的ゾーン、サービスゾーン、夫婦を中心とした静的ゾーンと、奥行き感のある横割りの3ゾーン構成。共に、キッチンが住居の中心の位置にあり、コミュニケーションの要となることを期待されている。

7. 新標準型・家族共生住宅の提案

古い標準がその意味をなさなくなった今、新しい標準が真に求められている。51C型の登場以来すでに50年たっており、新しい標準設計がそろそろ登場しても良い時期である。標準である以上、個性的なものではなく、それぞれの家族の多様性やライフステージの変化に耐えられるものが求められる。前述した2つの空間図式はこの要求に対応したものと考えることが出来る。

21世紀を向かえるに当たっての、フレキシブルで、ロングライフな家族生活、家族共生生活を支える新しい住居形式のモデルという意味において、2つの住居タイプを提案したい。共に、住み手が自由に新しい住み方、家族のあり方をつくりあげていくための、親密で

開かれた場を提供しようというものである。

1) 2000A 型——ビッグコモンタイプ

図6 ビッグコモンタイプ住戸

上図のように、外廊下からバルコニーまでの風の抜ける大きな、オープンリビング（ビッグコモン）を設け、その大空間の幹に、親のスペース、子供のスペース、サービススペースがぶら下がった形の空間構成となる。開放的でのびのびとした構成であり、棒状領域は存在せず、ビッグコモンが家族交流スペースとなる。キッチンがオープンスタイルとして、ビッグコモンの中央に設け、コミュニケーションのキーステイション的な役割を持たせる。可動間仕切の開閉により、親スペース、子供スペースは、それぞれビッグコモンと一体化し、時にビッグコモンを取り込んだ形として機能することもある。基本的にはフレキシブルな空間構成であり、中央のオープンキッチンが象徴としての家族の中心となる。

2) 2000B 型——ダブルリビングタイプ

図7 ダブルリビングタイプ住戸

上図のように、セット型の2つのリビングを持つタイプ。玄関前のリビング(1)は交流をテーマとしたマルチリビング。食事はもちろん、子供の勉強・遊び、近所の人との雑談、親と子の交流など、さまざまな活動に使える、動的な領域であり、カウンターキッチンが領域の要として、その活動を支援し、見守る位置にある。リビング(2)は、奥まった位置にある落ち着いた場所であり、静けさを楽しむ場所でもある。親スペースとの間仕切を開け洗面横の引き戸を閉めると、ホテルのスイートルームのような、夫婦2人の安らぎの空間となる。間仕切を閉めれば、奥の間として、親しい友人を招き入れたら、子供たちとの気分を変えたコミュニケーションの場としたり、独立したスペースとしても使うことが出来る。基本的にはフレキシブルな空間構成ではあるが、2つのリビングにヒエラルキーを持たせ、相互の関係を大切にすることにより、柔軟に変化する情緒性の高いスペースをつくっていかうという考え方である。可動間仕切を適切に使い、日本風の住宅のように、スペースを分割し統合して、空間を豊かに使い、家族のコミュニケーションを生む、生活のさまざまなシーンに対応しようというものである。

8. 事例について——個室群的構成タイプ

以上の計画案は、首都圏において、一般のサラリーマンが購入可

能な大きさ、75m²を想定している。ここで提案した、スペースを重層的に使うプランであれば、狭さを感じることなく、状況に応じた快適な生活が可能となる。理想論ではなく、現実論としての標準的規模のなかで、より本質的な、家族共生型の住宅を構想した。

また、規模の大きい90m²タイプのもので、下図のような、個室群的な住戸構成のプランを別に設定している。

図8 個室群的ダブルリビング家族共生住戸 (90m²)

2000B 型を応用したタイプであり、子供室を2つに分けリビング1の左右に、夫婦室を2つに分けリビング2の左右に、それぞれ配置したものである。各個室はリビングに対して対等に配置され、それぞれ可動間仕切により、リビングと区画されている。夫婦室を2つに分け、夫婦別室とすることにより、各人が一つの個室を持ち、それぞれの個室が共用の家族室に対して独立し、なお開かれているというコンセプトが実現される。あまり形式ばらない形の個室群的住居構成であり、自然な家族相互の交流がはかれる、フレキシビリティの高い家族共生型住戸プランになっている。

9. まとめ——社会が住宅をつくり、住宅が社会をつくる

足早に論を進めたが、nLDK という問題の一つの回答が得られたように思う。やはり、社会が住宅を作り、住宅が社会を作るという面があることは否定できない。広い意味における nLDK という思想が、家族の解体という傾向と、少子化という方向を早める作用をした（手助けをした）と考えることが出来る。今という時点においては、家族である (Be) ということは、家族する (Do) ことの積み重ねの上にはしか有り得ないという苦い認識から出発しなければならない。その第一歩が、今回の新標準型・家族共生住宅モデルの提案であり、実践であると位置づけたい。

けれども、いかに住むか、いかに家族関係を作っていくか、ということに関して、購入者の意識、開発販売者の意識において、どうしてもメジャー指向が強く、古いパターンに捕われて、新しいパターンの採用に踏み切れない面がある。見かけの設備の新しさに捕われることなく、長く生活する場としての空間の配列を考えていくことの重要性を理解してもらうことが必要である。地道な研究のほか、具体的なアピール、宣伝、事例の積み重ねを通して、今後とも、社会の厚い壁をブレイクスルーするために努力していきたい。

注 (*1). 平面形状をそのまま表現したもの。これにより、個室と家族室が分断されると共に、空間相互の関係性が希薄になり、家族相互の何気ない交流が疎外される。

(*2). 上野千鶴子 住まいと住宅の未来 住宅 1999.9

(*3). 居間・食堂に面して玄関ホール、各個室のある住戸タイプ

[1999年10月20日原稿受理 2000年2月2日採用決定]